

哲学研究

第五百九十六号

現代キリスト教思想における自然神学の意義

芦名定道

一 はじめに

現代世界において、科学技術は今や不可欠の存在となっている。しかし同時に、科学技術は問われるべき一つの思想的問題であり、キリスト教思想においても、3・11以降、「原子力とキリスト教」など、科学技術をめぐってはさまざまな議論が行われている。⁽¹⁾近代の科学技術文明は行き詰まってしまったのか、しかしそうであったとしても、別の選択肢は存在するのか。そもそも、こうした問題について、キリスト教思想においていかなる議論を展開することができるのか。本稿の目的は、このような科学技術をめぐる問題状況を念頭に、キリスト教思想における科学技術論（宗教と科学）関係論に基づく科学技術の神学）の基礎論として伝統的な自然神学の意味を再考することにはかならない。宗教と科学の関係をめぐっては、キリスト教思想史の近代以降にかぎってみても、宗教と科学の対立論から両者の分離論を経て対話・再統合論へいたる幅広い位相を確認することができる。科学技術の神学を具体化するには、近代以降（特に一八世紀以降）の歴史的展開の理解が不可欠であり、本論に先立って、この歴史的な問題状況を概観してみよう。⁽²⁾

一八世紀以降の西欧の思想状況を理解する上で重要なものは、啓蒙思想の登場であり、また新しい思想動向に敏感な知的エリート層の存在である。啓蒙思想は、いわば複合的な思想運動であって、決して単一的な規定が可能なものではなく、宗教思想との関わりにおいても、理神論から異端的宗教論や懐疑論、そして宗教批判（無神論あるいは唯物論）までの広範な思想動向を含んでいる。また、啓蒙思想は単純に反宗教思想であるわけではなく、そこには、ニュートン主義の自然神学に見られるようなキリスト教自然神学の伝統内部での思想構築を見出すことができる。⁽³⁾ 理神論、自然神学、自然主義、歴史主義といった思想動向は、近代以降の宗教と科学の関係をめぐる議論において重要な論点を提供しているのである。

その後、宗教と科学との関係をめぐる論争は多岐にわたる問題領域を巻き込みつつ、現在に至っているが、一八世紀以降の顕著な動向として、生命現象が論争の中心的な争点を形成していることを指摘できる。この動向は、ジョン・レイ『創造のみ業に顕れた神の知恵』（一六九一年）から、ウィリアム・ベイリー『自然神学』（一八〇二年）へ至る自然神学の展開過程において徐々に進展し、一九世紀後半の進化論論争に至ることになる。⁽⁴⁾ これが意味するのは、生物学が生命現象を対象とする近代科学として成立するプロセスと宗教と科学との論争テーマとの並行関係である。つまり、宗教と科学の関係をめぐる問題は、科学の新たな進展、新しい科学の成立によって繰り返し新たな形で提出されてきたのである。近代初頭、ケプラーからニュートンの時代には天文学や物理学が問題の争点であり、また、二〇世紀の科学的な心理学の登場が心的現象を問題の争点へと押し上げ、それにさらに近年の脳神経科学が加わって現代の問題状況を構成するに至っている。これらは、宗教と科学の関係論と科学の進展の間の並行関係の実例と言える。それゆえ、原子力や遺伝子工学などの現代の科学技術についても、それに応じた議論の再構築が要求されざるを得ない。こうした議論の再構築にとって、問題状況の歴史的理解は不可欠であり、キリスト教思想における科学技術論自体が、この歴史的展開を共有しているのである。したがって、本稿では、「科学技術の神学」へアプローチするために、「宗教と科学」関係論

の近代以降の歴史的展開に焦点を合わせ議論を進めることにしたい。二〇世紀のキリスト教的科学技術論はどのような仕方でも現代の問題状況に至ったのか、その中で今どのような思想的探究がなされつつあるのか。こうした諸問題を検討することによって、科学技術の神学にむけた具体的な思索が可能になるのである。

以下において、二〇世紀の前半から中頃のキリスト教思想を代表するティリッヒと、ティリッヒに続く世代を代表するモルトマンとを取り上げることによって、宗教と科学をめぐる関係論がどのように進展し、それが自然神学の再構築という問題に至ったのかが辿られる。すなわち、続く第二節では、ティリッヒの科学論の進展を分析することによって、宗教と科学の関係論が両者の分離論から対話論へ進展していることを明らかにし、第三節では、モルトマンにおいてティリッヒの問いが継承されていることと、それが自然神学の問題として捉えられるに至っていることを確認する。そして、最後の第四節では、モルトマン以降の自然神学をめぐる最新の動向を紹介することによって、本稿を結びたい。

二 ティリッヒ、分離論から対話論へ

プロテスタント・キリスト教神学は、第一次世界大戦を境に、大きな展開を示した。一九世紀的な神学からの訣別を宣言した弁証法神学の登場は、キリスト教思想における現代神学の開始と解することができる。この新しい状況において、宗教と科学の関係理解も一九世紀後半の宗教と科学の対立図式から、次の段階に移ることになる。それは、対立関係を含め、神学と諸科学との緊密な相互連関を主張する立場から、両者の区別あるいは分離を強調する立場への移行であって、本節では、この移行をティリッヒの思想の発展過程において確認し、さらに分離論から対話論への進展について考察を行うことにしたい。⁽⁵⁾

(一) 前期ティリッヒの科学論と分離論への移行

まず前期ティリッヒにおける科学論を検討することにしよう。ティリッヒは一九世紀の自由主義神学と二〇世紀の弁証法神学とのいわば交差するところにおいて思索している点で、現代キリスト教思想の中で独自の位置を占める思想家であるが、この特徴は、前期の科学論において明瞭に示されている。一九世紀のキリスト教は多様で痛烈な批判に遭遇してきた。一方で、キリスト教は、近代的合理主義によって、その合理的根拠をめぐる根本的な批判を提起され、他方では、キリスト教が人類の理想社会の形成に寄与し得るかについても、重大な疑いを投げかけられることになる。ティリッヒの思想的課題は、こうしたキリスト教批判に対して応答すること、つまり、近代人・教養市民層におけるキリスト教的伝統への批判に対して、学問論・科学論のレベルで応答し、また労働者階級のキリスト教・キリスト教世界への批判に対して、社会改革への参与などを通して実践的レベルにおいて応答することだったのである。⁽⁶⁾ ティリッヒは、自由主義神学が近代のキリスト教批判に対して、学問論レベルで答え、そのような仕方では科学的なキリスト教神学の形成を目指したのと同様に、科学論の構築に基づいて神学の科学性を明確化することを試みている。そこで、まず、一九二〇年代のティリッヒの科学論を含む「文化の神学」(Kulturtheologie)を概観してみよう。

「文化の神学」は、一九二〇年代のティリッヒを特徴付ける思想構想であって、近代プロテスタンティズムが直面した宗教と文化の分裂状況(他律と自律の対立)を克服するために、宗教と文化を新たな仕方でも統合することを目指している。つまり、その意図は、近代の自律的理性に合致した真理とキリスト教的伝統の信仰的真理という二重真理状態を克服することなのである。

この二重性はどんなことがあっても廃棄されねばならない。それは、意識にのぼるやいなや耐え難いものとなる。なぜなら、それは意識を破壊するからである。(Tillich, 1919, S. 74)

この「文化の神学」構想には、宗教研究という観点から、次の三つの課題が課せられる。(1)文化の一般的な宗教的分

析、(2)文化の宗教的類型論と歴史哲学、(3)文化の具体的で宗教的な体系化の三つである (ibid., S. 76)。この三つの課題は、一九二三年の科学論(「諸学の体系」)において、精神科学を構成する、哲学(宗教哲学など)、精神史(宗教の精神史など)、規範的体系学(体系的神学など)の三つの要素として展開されることになるが、この諸学の体系論は、空虚な形式主義という批判に応答しつつ——「認識そのものが、認識の体系を構築するように要求」(Tillich, 1923, S. 116)する——、認識行為の現象学的分析によって提示される。すなわち、諸学における認識行為について、その認識の心的内容などの実体化を中断し(自然的態度のエポケー)、純粹意識の領野における志向相関を直観的に確保しつつ記述することによって、思惟(Denken)と存在(Sein)という認識行為を構成する本質的要素(認識の原理)が取り出される。そして、これら二つに第三の要素として精神(認識行為自体についての認識。認識の自己参照性)を加えた三つの原理——「我々は思惟、存在、精神の三つのもを諸学の体系の基礎」(ibid., S. 121)とする——から、諸学の体系の全体像(思惟科学、存在科学、精神科学)が次のように描かれるのである。

① 思惟科学：論理学、数学、現象学

② 存在科学：法則、形態、継起という実在のあり方に対応して。

(1) 法則科学：数理物理学、力学、化学、鉱物学

(2) 形態科学：生物学、心理学、社会学、医学、教育学、社会経済学、統計学

(3) 継起科学：歴史学、人類学、記述民族学、言語学、文献学

③ 精神科学：哲学、倫理学、神学、形而上学、政治学、国家論

神学は、この諸学の体系の内部において、次の二重の仕方によって規定され、それぞれの仕方に応じて神学の科学性が論じられる。まず、神学は精神科学に属する一科学(規範的で体系的な宗教論)である。諸学の体系内に位置する高度に専門化された一学科であることによって、神学はそれに応じた固有の専門領域と科学性を有することが認められる。

この際に留意すべきは、諸科学との体系的な整合性ゆきに、神学のこの科学性は理解することができないという点である。というのも、神学は宗教を認識対象とする宗教哲学や宗教史とともに宗教学を構成しており、シュライアマーが借用命題として論じたように、隣接する諸学科との緊密な関係性において一つの科学として存立可能になると考えられるからである。神学は、学の体系内の隣接諸学科との密接な関わりの中に位置づけられており、この連関の外においては、神学の科学性は保証できない。以上の点は、一九二〇年代の科学論の中心的議論であり、ティリッヒは自由主義神学の線で神学の科学性を論じていると言ってよいであろう。

しかし同時に、神学には、神律的という精神的態度が結びつけられている。神律 (Theonomie) を論じるには、意味概念の分析が必要となるが、ティリッヒの意味論の要点は次のようにまとめられる。意味は意味連関という形式を有している。たとえば、語の意味はその語が属する言語体系 (連関) 内の諸語との関係性 (差異と類似) という形式において規定できる。この点で意味とは意味連関にはかならない。しかし、意味連関全体の意味はこの意味連関内部の関係性という形式によっては規定できない。言語体系の全体は、言語共同体の基本的な実在理解に依存し、歴史性を帯びているからである。ティリッヒは、これを意味の内実 (Gehalt) と呼び、「形式—内実」(Form-Gehalt) という対概念にもとづく意味論によって、諸学の体系の構造を論じている。諸学の体系は、諸学相互の形式 (これが先に見た科学性に対応する) だけでなく、体系の内実という点からも理解されねばならない。ティリッヒは体系の内実について次のように説明している。

現実の体系が構築されるところにおいては、形式の内に、単なる形式以上のものが顕わになる。この体系の生きた力が体系の内実であり、体系の創造的な立場、根源的直観なのである。あらゆる体系は、それを根拠づけ構築する原理によって活力が与えられている。しかし、すべての究極原理は究極的な現実直観、根源的な生の態度の表現である。内実が、諸学の形式的体系を通して、あらゆる瞬間に現れ出る。それは形而上学的であり、すなわち個々の

形式や諸形式全体を超えている。……形而上学的ものは体系の生きた力、意味、血液なのである。(Ibid., S. 118)

諸学の相互連関という形式が諸学の自律性に関わるのに対して、ティリッヒの言う神律とは、この内実への精神の志向性にほかならない。そして、「神」という世界体系全体の内実を志向する点で、神学とは神律的体系学なのであり、体系の内実を直接主題化する神律性という点においてこそ、神学と他の諸科学との決定的な相違が認められねばならない——神学と形而上学との関係という問題は残るとしても——。したがって、神学の科学性は、単に諸科学との整合性においてのみ見出されるのではなく、諸科学が共通に前提とする諸学の体系の内実との関係性というもう一つの基準によって理解されねばならないのである。これが、ティリッヒの一九二〇年代の科学論において神学について問われるべき第二の科学性にほかならない。

諸学の体系内部における諸学との相互連関とその固有の位置づけに基づく第一の科学性が一九世紀の自由主義神学の線にあるのに対して、体系の内実との神律的關係に規定された第二の科学性は、一九世紀の神学的思惟とティリッヒとの差異性、あるいは二〇世紀の弁証法神学の問題意識との類似性を示しており、この点で、ティリッヒの科学論と神学理解は、一九世紀の神学思想と二〇世紀の思想が交差する地点において展開されていると結論づけることができる。以上のティリッヒの二〇年代の科学論は、本稿のテーマである、宗教と科学の關係論との関連において、どのように理解できるであろうか。一方で、一九世紀的な科学論に基づく神学の科学性の議論が、諸学の体系内部での神学と諸学との相互連関を明らかにすることにより、神学と諸科学との対立を回避する試みであるのに対して、二〇世紀的な問題意識を共有してなされた神学についての議論は、神律的な学としての神学と自律的な学としての諸科学との原理的な區別によって、神学と諸科学との対立を一拳に根底から解決しようとする試みと解すことができる。つまり、両者共に、進化論論争やマルクス主義との論争に見られるような対立図式への批判的な応答であり、全体としては、宗教と科学の關係論における対立論から分離論への移行の完成と見ることができであろう。こうした分離論を基調としたあり方は、

ティリッヒや彼と神学に関する問題意識を共有する弁証法神学の神学者たちに共通したものである。こうして、二〇世紀は、一九二〇年代から一九七〇年代にかけて、宗教と科学との原理的区別に基づく分離論が支配的な時期となった。⁽¹⁰⁾

(二) 後期ティリッヒの科学論、分離論から対話論へ

一九三三年のアメリカ亡命後も、ティリッヒは新しい学的环境において思索を継続し、その成果は一九五〇年代の後期の著作においてまとまった形で示されることになる。この時期の主著『組織神学』全三巻（一九五一―六三年）は「相関の方法」(method of correlation) によって神学体系の構築を試みたものであり、そこに後期ティリッヒの科学論を確認することができる。まず、この相関の方法から検討を始めることにしよう。

相関の方法は、キリスト教のメッセージを人間の状況が内包する問いに対する答えとして解釈し相関させることによって、キリスト教神学の体系を提示する試みであり、キリスト教のメッセージの真理性あるいは有意性を時代の思想状況の中で提示するという前期の思索から一貫した弁証的意図に基づいている。⁽¹¹⁾ この相関をめぐる神学と哲学の関連については、次のように説明される。

人間の状況の分析は、文化の全領域における人間の創造的な自己解釈によって利用可能とされた素材を用いる。……神学者はキリスト教のメッセージによって与えられる答えとの関係で、これらの素材を組織化するのである。このメッセージに照らして、神学者はたいいていの哲学者が行うよりも、透徹した実存の分析を行うかもしれない。それにもかかわらず、それはなおも哲学的分析なのである。実存に含意された問いを展開しつつ、実存を分析することは、哲学的課題である。たとえ、それが神学者によって遂行され、またそれがカルヴァンのような宗教改革者であったとしても、そうなのである。(Tillich, 1951, 63)

一九二〇年代の諸学の体系においては、哲学は独立した一つの精神科学であるというよりも、精神科学に属する諸学

すべての基本的な構成要素として捉えられている点に特徴があった。たとえば、宗教学における哲学的要素としての宗教哲学、芸術学における芸術哲学、法学における法哲学などである。この場合の哲学は、学科としての神学の外部にある相関者として位置づけることはできない。これに対して、後期ティリッヒでは、哲学は相関の方法の文脈において、状況が内包する問いの定式化という役割を担うことになり、これは、哲学に諸科学に対する、いわば特権的位置を与えることになった。

科学的探究と神学との間の接点とは、科学と神学の両者における哲学的要素のなかにある。それゆえ、神学の特殊な科学に対する関係の問いは、神学と哲学の関係の問いに統合されることになる。(ibid., 18)

したがって、ティリッヒの後期思想においては、哲学が、宗教と科学の関係論の中心に位置し、この哲学を介して神学と諸科学とは関連づけられるのである。この場合の哲学は、相関の方法に即して言えば、問いの定式化に関わるものであるが、その実際の機能に従えば、哲学は問いのみならず答えの定式化にも関わっており、哲学の位置づけは決して単純ではない。つまり、キリスト教のメッセージを状況の問いに対する答えとして、解釈すること自体、哲学的解釈的作業であって、キリスト教思想の科学性がこの解釈学的構造において具体化されるという点で、後期ティリッヒの科学論はまさに解釈学的であることがわかる。こうして、宗教と科学の関係論の詳細は、哲学的要素の分析、特に哲学と神学との関係の分析を要求し、宗教と科学の対立は、宗教と哲学の対立に収斂することになる。この対立に関して、ティリッヒは、さらに次のような議論を行っている。

対立は戦いが行われる共通基盤 (common basis) を前提にする。しかし、神学と哲学の間には共通基盤は存在しない。……哲学的レベルでの対立は、二つの哲学者の間の対立であり、その内一人がたまたま神学者であっただけであり、それは神学と哲学の間の対立ではない。(ibid., 26)

この共通基盤が存在しないとの議論は、神学と哲学との関係についてのものであるが、すでに確認したように、これ

は神学と諸科学の間にも対立は起こりえないことを帰結する。この点で前期の科学論における神律的学と自律的学との根本的区別に応じるものと言える。意味内実を志向する神律的態度と意味形式の定位する自律的諸科学とは、それぞれいづれかの側に逸脱がない限り、本来、対立が生じるはずはないのである。たとえば、現代の創造論者と進化論者との間の論争は、厳密な意味での神学と生物学との対立ではなく、いづれか一方があるいは双方が、本来のあるべき学であり方から逸脱した結果発生した擬似的対立にはかならない。もちろん、そこには対立だけでなく対話も成立しない。しかし、この共通基盤の不在という主張はティリッヒの議論の一面であり、それは、共通基盤と対比される共通根拠 (common ground) への示唆から読み取ることができる。この共通根拠は、相関の方法という組織神学の方法論の基礎に関わる論点であり、次のような文脈で登場する。

問いに答えるためには、その人は問いを発する人間となにか共通なものを持っているのでなければならぬ。漠然とした言い方になるかもしれないが、弁証神学者は共通根拠を前提しているのである。(Ibid, 6)

問いと答えが相関するために必要な共通の何ものか、この共通根拠こそが神学と哲学との関連性、そして神学と諸科学との関係性を可能にするものなのである。もし、宗教と科学との対話が可能であるならば、それはこの共通根拠に基づくと考えられねばならない。後期ティリッヒにおいては、この共通基盤と共通根拠をめぐる議論(特に両者の関係について)はそれ自体としては追及されることなく、ティリッヒ自身が述べるように、「漠然とした言い方」とどまっている——前期の思索における意味概念の分析は共通根拠を論じる上で一つの可能性を示していると言えるかもしれない——。その理由の一つとして、宗教と科学の関係に関して、ティリッヒは基本的に分離論の立場をとっており、この共通根拠についての議論を深める必要性を十分に意識していないことがあげられるであろう。しかし、後期ティリッヒの思想をさらに詳細に見るならば、分離論を乗り越える展開を確認することは決して不可能ではない。たとえば、一九五〇年代後半から始まり『組織神学』第三巻に結実する次元論はその観点から理解できるのである。¹²⁾しかしここでは、

この問題には立ち入らず、晩年期のティリッヒの思索から、宗教と科学の関係論の新しい展開を示唆する次の議論についてのみ指摘しておきたい。

なぜなら、科学にはもう一つの要素が存在するからである。それは、人間の精神的生の全体に、それゆえ宇宙における人間の自己解釈に、科学が参与していることである。かつて、このような神話論的また形而上学的な言葉における自己解釈から、科学は生まれてきたのである。この発展のどの段階においても、科学はその根拠を完全に捨て去ることはなかった。科学自体が宗教的次元に到達するのは、この点においてなのである。(Tillich, 1960, 155)

この科学自体の宗教的次元とは、神学と哲学が、あるいは神学と諸科学が相互の対話において参与すべき「宇宙における人間の自己解釈」「人間の精神的生の全体性」であって、先に共通根拠として指示された事柄であると考えられる。この意味での共通根拠がティリッヒに続く神学者が問うべき問題となるのであるが、その点については次節においてモルトマンを手がかりに論じることとし、本節は、宗教と科学の関係論をめぐる晩年のティリッヒの展望（再統合あるいは協力の希望）を引用するにとどめたい。

さて、これはわたしを最後の地点へと導く。そして、わたしは次のように語ることによって総括したい。宗教、科学、哲学の間の対立の時代は、原理的に過ぎ去った。もっとも、思想のより古い時代に逆戻りしている個々人はまだ存在しているけれども。わたしたちは寛容の時代に生きているのだ。これは決して満足できるものではない。というのも、それは相互に認め合うことがないからである。……そこで、われわれは常に再統合を、この場合は、協力を求めている。そして、これが今日可能なのである。これは多くの場所で始まっており、わたしは、それがますます力ある現実になるかもしれないという希望を表明したい。(Tillich, 1963, 172)

三 モルトマン、宗教と科学の対話と自然神学の課題

(一) モルトマン神学の展開と科学論

モルトマンはバルトやティリッヒらに続く世代の神学者の一人であり、現代のキリスト教思想に大きな影響を与えてきた思想家である。これまでモルトマン（特に前期モルトマン）は、社会批判や社会哲学、そしてそれに連関した終末論に特徴があると考えられてきた。次の、森田の指摘は標準的なモルトマン解釈と言えるであろう。⁽¹³⁾

第三の新しい動向を代表するのは、J・モルトマンであり、彼を一躍注目させるに至ったのは、『希望の神学』（一九六四年）であったことは、あまりにも有名である。モルトマン神学はやがて「革新の神学（革命の神学）」の展開をうながし、その後のWCCの神学的基本線を提供する。……モルトマンの最初の三部作『希望の神学』、『十字架につけられた神』（一九七二年）、『霊の力における教会』（一九七五年）を読むとき、われわれはプロッホのみならず（たとい多くの言及がなされずとも）アドルノ、ハバーマスといったフランクフルト学派のいわゆる「批判的理論」の社会哲学の主張がいたるところで考慮されていることに気づくことであろう。（森田、一九八七、四二）

しかし、モルトマンの思索は、一九八〇年以降になると、大きな転換を迎えることになり、それは、森田が、「直ちに気づく新しい特色は、彼がエコロジの神学を唱える米国のプロセス神学にかなりの接近を示している点である」（同書、四二）と論じる通りである。本稿ではモルトマンに関して従来あまり問われることがなかった、前期から後期の全体を貫く隠れた思索の線として「宗教と科学」関係論に注目することにした。それによって、前節で見たティリッヒの問いの継承と発展について一つの可能性を見出すことが期待できるからである。

実際、モルトマンを一躍有名にした『希望の神学』とはほぼ同時期の諸論考において、モルトマンはすでに科学あるいは科学技術について言及を行っている。まず、『神学の展望——現代社会におけるキリスト教の課題』（一九六八年）と

題された論文集の第一二論文「近代科学の世界における神学」（一九六六年）に注目してみたい。ここでモルトマンは、現代の状況において、神学と自然科学が、「互いに関連なく並行して、もはや何も言うべきことがない発言の葛藤喪失の中」にあつて、「互いに意味なく並存している」（Moltmann, 1968, 269f.）こと、つまり、「精神神学と自然科学との間の溝」（ibid., 271）が存在することを指摘する。これは、一九世紀から進展しモルトマンの前世代の神学者たちが共有していた分離論がもたらした事態であり、精神的営みは「様々な真理の諸領域」に別れ、「近代精神におけるこのような複線化」（ibid., 272）が進行しつつあるとされる。しかし、モルトマンはこの分離論にとどまることはできないと考えている。

現代科学は、現代の技術の可能性と解きがたく結合されている。それはさらに社会全体の巨大科学と国家的計画においてなされるべき投資に依存している。このような投資は、かかる企画において人間を尊重する生の未来が求められる場合にのみ、意味深いものとなる。ここに政治と社会全体そして考慮されるべき未来のヴィジョンとが、相互依存の関係にあることが告げられる。（ibid., 285）

科学と技術が今や不可分な巨大な一つの實在として国家的プロジェクトの中心をなすにいたった現代世界、これがモルトマンの問う科学技術の現実形態であり、未来のヴィジョン（希望）というキリスト教思想の主題はこの新しい問題の文脈に位置づけられねばならない。この文脈においてモルトマンが指摘するのは、「純粹な客観性を越えて新しい道徳性（エトス）を要求する責任」（ibid.）ならびに、科学と希望の未来の目標とを相互に媒介する対話の意義（ibid., 287）なのである。以上から、モルトマンが前節で見たティリッヒと問題意識を共有していることは明らかであり、ここに一九六〇年代から一九七〇年代にかけてのキリスト教思想の転換を確認することができる。

前期モルトマンについて、次の二点を指摘しておきたい。まず、論文「近代科学の世界における神学」における科学技術の議論は、前期モルトマンにおける周辺的な問題ではなく、『希望の神学』から始まる神学構想自体に含意されて

いたと言わねばならない。たとえば、論集『神学の展望』の第一論文「希望と計画」(一九六六年)で、モルトマンはカントの歴史哲学に言及しつつ、次のように論じている。

キリスト教的希望は、未来を宿命的にタブー視してはならない。それはまた、神信仰の助けによって未来に対応できるなどと考えるはならない。しかしまた、展望することのできなくなった世界の中で、人間は「頭を高く上げて」意義深い目標を認識し、それに向かって人間のまた物質的諸力を投資する勇気を見つげるために努力すべきなのである。(ibid.: 268)

神の事柄である約束と希望は、人間の主体的行為と未来に向けた計画性を廃棄するものではなく、むしろ両者は結びつけられるべきなのである。¹⁴まさにこの人間の計画性は、すでに見たように、現代世界において、科学技術から分離することができない。モルトマン神学において、科学の問題は確かに目立つテーマではなかったとしても、前期の思索において意識的かつ継続的に取り組まれていたのである。

次に指摘したいのは、モルトマンが宗教と科学との継続的な対話の課題として位置づけていた「純粋な客観性を越えて新しい道徳性を求める責任」が、「十字架につけられた神」(一九七二年)とほぼ同時期の論文で、さらに踏み込んで論じられている点である。モルトマンは、『科学と知恵——自然科学と神学の対話』(二〇〇二年)の第九論文「人間的倫理と生化学的進歩の道徳性(エトス)」(一九七一年)で、「ウイルスおよびバクテリア性感染症の克服」「無菌世界というヴィジョン」、「向精神薬の発達」「痛みなき世界」、「臓器移植技術」「交換可能な身体」、「新しい優生学」といった生命倫理の諸問題に言及しつつ、「このような人間の関心、希望、ヴィジョンに基づいて、生化学の進歩そのものが、人類の偉大な倫理的企てとなるのである」(Moltmann, 2002, 155)と指摘している。

まさに生医学的進歩は幸福を保証するものではないのだから、それに対応すべき人間性の倫理は、苦痛の医学的緩和や若干の病気の追放だけでなく、苦痛や病氣や死を人間が受け入れ、意識的に自らのものとすることに目をとめ

なければならぬ。身体の秩序が人間の人格の秩序と統合されねばならぬように、生医学の進歩もまた、人間性の秩序の中に統合されねばならないのである。(ibid., 169)

新しい道徳性、人間性の倫理。これこそが、宗教と科学が相互の対話において問うべき共通課題なのである。⁽¹⁵⁾

(二) 後期モルトマンと自然神学

前期モルトマンが晩年のティリッヒと同様に、宗教と科学の分離論が支配的な状況下で、対話の必要性を意識していたことは、これまで見てきた通りであるが、この問題が具体的に展開されるのは、一九八〇年代以降の後期の思索における新たな神学構想を待つ必要があった。以下において、この新しい神学構想の中で自然神学への言及がたびたびなされ、宗教と科学の対話において重要な役割が割り当てられている点について確認してみたい。

一九八五年の『創造における神』において、モルトマンは、現代の環境危機との関連でキリスト教的創造論を再考する試みを行っているが、この環境世界・生態系を神の被造物として認識する根拠を論じる際に取り上げられるのが自然神学なのである。この場合の自然神学とは、これまで繰り返してきた「自然が神認識のためにどんな貢献をするのか」を問うものではなく、「神概念が自然認識のために」、従って環境論を展開するために、「どんな貢献をするのか」(Moltmann, 1985, 66) を問題にするものなのである。これは後に見るように、自然神学と啓示神学を二つの分離可能な神学的営みとする従来の標準的理解を修正する試みとなる。

モルトマンは、まず自然神学がストア哲学に由来するものであり、そこで問われる「自然」とは、経験を通して知ることができる自然ではなく「事物の本質」であること、またこの意味での自然がキリスト教思想においては有限で依存的で偶然な被造物と解されたことの確認から議論を開始する。⁽¹⁶⁾ 続いて、伝統的な創造と聖書に由来する二重の神認識という枠組みにおける自然神学、つまり、「自然という書物」からの神認識(良心の内なる証しによる神の先天的認識と、

自然認識から得られた神認識」という議論が取り上げられる。この意味での自然神学は楽園における神認識の残余、痕跡、想起という仕方で救済論的に分類され、また啓示神学に対しては、その準備、確認、目標、代用、競争、敵といった仕方で論じられたのである。こうしてモルトマンは、自然神学がキリスト教神学において、真の神の啓示についての問いへ導く教育的機能、人間を信仰の理解（信仰の知解）へと至らせる解釈学的機能、そして終末の栄光における神認識の先取りとしての終末論的機能という三つの機能を果たしてきたことをまとめたと、自然神学と啓示神学との関係について、終末における栄光の神学を含めて次のように主張する。

「自然神学」と「啓示神学」の区別は誤解を与える。神は一なるものだから、二つの相違した神学があるのでなく、ただ一つの神学があるだけなのである。しかし、この一つの神学は、様々な状況と時代的制約下にある。

この状況と時代的制約は、そのつどの神の現在の様態 (*modus praesentiae Dei*) によって決定される。(ibid., 72) つまり、自然神学が原初の創造（自然の国）という条件下での神学であるのに対して、この自然だけでなく罪と墮落をも含む歴史（恩恵の国）という条件下あるいはこの歴史を導く神の恩恵という条件下での神学が啓示神学なのである。それゆえ、啓示神学は十字架の神学、メシアの神学、旅人の神学と特徴付けられることになる。それに対して、終末の栄光（栄光の国）の条件下での神学は栄光の神学と呼ばれねばならない。重要なことは、これらの諸神学において、「そのつど後に続く神学の形態が先立つ神学の形態を自らの内に受容していること」(ibid., 73) である。したがって自然神学はキリスト教神学自体の基礎構造をなしていると言わねばならない。実に、「啓示神学は歴史という条件下での自然神学」(ibid.) なのである。こうして、後期モルトマンの神学構想においては、自然神学が自然と歴史という存在形態において実在する現実を被造物として認識する上で決定的な役割を果たすことになるのである。

しかし、この自然神学の意味が十分に明らかになるには、さらに一定の時間を要することになる。一九八〇年から始まった新しい神学構想は、『創造における神』を経て、モルトマン神学の方法論の提示とも言える、『神学的思考の諸経

験』（一九九九年）において完結したが、この『神学的思考の諸経験』において、「宗教と科学」関係論に対して自然神学の果たすべき役割が、明確に表明されるのである。

モルトマンは、第一章「神学とは何か」（神学体系の序論的考察）を締めくくる最後の第六節において自然神学についてまとめた考察を行っている。それは、「キリスト教神学の前提としての自然神学」「キリスト教神学の目標としての自然神学」「キリスト教神学自体が真の自然神学である」「キリスト教神学の課題としての自然神学」の四つの部分にわかれているが、ここでモルトマンは、現代のキリスト教思想の課題を、「被造物の神学」は、現代の新しい生態学的危機と挑戦に立ち向かわなければならぬ」（Moltmann, 1999, 82）とした上で、この課題を遂行するために、「自然科学や科学技術との共同作業のために、私たちは、『自然神学』の枠組みを必要としている」（ibid.）と述べている。これは、自然神学が神学と科学、宗教と科学との共同作業（おそらくは対話に基づく）の基盤を提供する役割を果たすという主張にはかならない。この共同作業の基盤がティリッヒの言う共通根拠に相当するものであることは明らかであり、こうして後期モルトマンにおいて、二〇世紀のキリスト教思想は、対立論を分離論において乗り越え、さらに環境危機という共通課題に取り組むための対話論へとたどり着いたことがわかる。しかも、こうして展望された共通根拠は、宗教と科学との共同作業を遥かに超えた射程を有しているのである。

様々な宗教共同体が、多宗教的社会とグローバル化した世界において、共に生きていくのに応じて、これらの宗教共同体は、……それらのもろもろの差異が表現できる、共通の場所を見出すであろう。……宗教性は世俗性と同様に、共通の生に奉仕しなければならない。（ibid., 84）

宗教と科学との対話を可能にする共通根拠は、同時に、複数の諸宗教相互の、そしておそらくは複数の世俗性相互の多様な対話をも可能にするものとなる。本稿は、キリスト教思想における科学技術論（「宗教と科学」関係論に基づく科学技術の神学）の基礎論として伝統的な自然神学を再考することを目指して、二〇世紀のキリスト教思想の展開を辿っ

てきたが、後期モルトマンの自然神学は、その一つの到達点を示すものと言えるであろう。

四 むすび

後期モルトマンが神学的思索の一つの到達点を指示するものであるとして、これで思索の歩みは終わるのであろうか。ティリッヒの共通根拠が自然神学の課題として明確に位置づけられたことは確かであるが、その細部はモルトマンにおいても不明瞭なままにとどまっている。与えられたのはおおまかなスケッチに過ぎず、さらに継続的な探究が求められる。では、モルトマンの思索を引き継いで、二一世紀のキリスト教思想はどこに向かって進んでいこうとしているのか。自然神学をめぐる二一世紀のキリスト教思想の方向性について、いくつかの論点を提示することによって、本稿をむすびたい。

(1) 自然神学をその歴史的背景から見直す作業。

自然神学の理解を深め、現代の問題状況においてその可能性を再考するためには、歴史的思想史的な研究のさらなる進展が必要である。本稿の論者はこれまでニュートン以降の自然神学の歴史的展開について集中的に研究を行ってきたが、世界的に見てもマクグラスらによる研究の蓄積が顕著である⁽¹⁷⁾。しかし、啓蒙主義の自然神学を批判的体系的に再検討するには今後多くの研究者による共同研究がなされねばならないであろう。特に課題になるのは、啓蒙主義がめざした伝統超越的な普遍主義に対して、マクグラスが主張する伝統特殊的な合理性の歴史的背景を明らかにすることである⁽¹⁸⁾。

(2) 自然神学の方法論の精密化。

キリスト教思想における科学技術論の基礎論として伝統的な自然神学を再考するためには、おおづかみなスケッチを精密な研究プログラムとして展開すること、つまり自然神学の方法論的精密化が必要になる。そのために、モルトマン

と同世代の神学者であり科学論の神学を提起しているパネンベルクやそれを方法論的に展開したクレイトンの研究などが参照されるべきであろう⁽¹⁹⁾。また、マクグラスが自然神学との関連で論じている意味論も注目されねばならない⁽²⁰⁾。意味論は前期ティリッヒの科学論の基礎をなすものであり、自然神学の方法論的な精密化への寄与が期待できる。

(3) 新たな問題状況における議論の追及。

自然神学の再考には科学の新たな進展を視野に入れることを必要とする。モルトマンは環境論との連関で新しい神学構想を展開し、クレイトンは最近の脳神経科学との積極的な対論を行っている。また、金承哲の遺伝子工学と神学との関わりをめぐる研究や3・11以降問題化している原子力をめぐる神学的試みも、自然神学再考を行う上で、参照されねばならない⁽²¹⁾。

(4) 社会科学への自然神学の拡張。

自然神学は伝統的に「自然の神学」という形で、しかもしばしば自然を通した神認識の問題として展開されてきたが、モルトマンも指摘するように、本来の自然神学は人間の被造的な自然本性に基づいた宗教と科学との共同作業の基盤構築に関わっている。すなわち、この点で、自然神学は「自然の神学」よりも大きな射程を有しており、たとえば、経済学や政治学といった社会科学への拡張は、現代のキリスト教自然神学の中心的課題と言わねばならない⁽²²⁾。なぜなら、環境論は科学技術と関連するだけでなく、経済学や政治学と緊密に関わっているからである。

略号

以下の文献は、略号で引用される。

Tillich (1919) : Über die Idee einer Theologie der Kultur, in: *Paul Tillich, Main Works* vol. 2, de Gruyter, 1990, S. 69-85.

(1923) : *Das System der Wissenschaften nach Gegenständen und Methoden*, in: *Paul Tillich, Main Works* vol. 1, de Gruyter, 1989, S. 113-263.

- (1951) : *Systematic Theology* vol. 1, The University of Chicago Press.
 (1960) : The Relationship Today between Science and Religion, in: J. Mark Thomas (ed.), *Paul Tillich. The Spiritual Situation in Our Technical Society*, Mercer University Press, 1989, pp. 151-158.
 (1963) : Religion, Science, and Philosophy, in: *Ibid.*, pp. 159-172.
 Moltmann (1968) : *Perspektiven der Theologie. Gesammelte Aufsätze*, Chr. Kaiser.
 (1985) : *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungstheologie*, Chr. Kaiser.
 (1999) : *Erfahrungen theologischen Denkens. Wege und Formen christlicher Theologie*, Chr. Kaiser.

注

- (1) 次の拙論を参照。声名定道「科学技術の神学にむけて——現代キリスト教思想の文脈より」日本宗教学会『宗教研究』三七号、二〇一三年、掲載予定。
 (2) 「宗教と科学」の關係の諸類型に *らふじや* Ian G. Barbour, *Religion and Science. Historical and contemporary Issues*. (A Revised and Expanded Edition of *Religion in an Age of Science*), HarperSanFrancisco, 1997 などを参照。
 (3) ニュートン主義の自然神学については、声名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、二〇〇七年、六九—一八七頁、を参照。
 (4) レイヤハイリーの自然神学、進化論論争については、前注の拙論の一九一—二一九頁を参照。
 (5) テイリッヒの思想の発展史については、声名定道『テイリッヒと現代宗教論』北樹出版、一九九四年、三九—四八頁、を参照。また、テイリッヒの科学論の展開については、声名定道「P・テイリッヒと科学論の問題」東北学院大学キリスト教文化研究所『キリスト教文化研究所紀要』第二〇号、二〇〇二年、一一—三一頁、を参照。
 (6) 弁証神学への関心は、初期テイリッヒの覚書「教会弁証学」から、後期の『組織神学』まで一貫しており、テイリッヒは基本的に弁証神学者と捉えることができる。この点については、声名定道『テイリッヒと弁証神学の挑戦』創文社、一九九五年、を参照。
 (7) テイリッヒとの関わりを含めたシュライアマハー思想の分析としては、声名定道「テイリッヒとシュライアマハー」、現

代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』第二号、二〇〇一年、一一七頁、を参照。

(8) ティリッヒの意味論(意味の形而上学)とそれに基づいた科学論については、これまで多くの研究がなされてきた。先駆的な研究として、James Luther Adams, *Paul Tillich's Philosophy of Culture, Science & Religion*, Harper & Low, 1965 をあげることができるが(これは現在においてもティリッヒ研究としての価値を失っていない)、意味論の概略については、注(6)の拙著の一七二―一八三頁を参照。また、前期ティリッヒの「ヘルリン講義」などにおけるティリッヒの意味論の形成と科学論との関わりについては、注(5)に挙げた拙論(二〇〇二)を参照。

(9) ハルトらの弁証法神学とティリッヒとの関係は、ティリッヒ研究における古典的な問題設定と言えるものであるが、ティリッヒ自身の次の文献がまず参照されるべきであろう。Paul Tillich, "What is wrong with the 'Dialectic' Theology?": in: *The Journal of Religion* (Chicago), vol. 15, No.2, 1935, pp. 127-145.

(10) 二〇世紀のプロテスタント神学における科学論の状況については、次の論文を参照。

Keith E. Yandell, "Protestant Theology and Natural Science in the Twentieth Century," in: David C. Lindberg and Ronald L. Numbers (eds.), *God & Nature. Historical Essays on the Encounter between Christianity and Science*, University of California Press, 1986, pp. 448-471.

(11) 「相關の方法」は後期ティリッヒ神学の方法論として有名であるが、その論理構造については、注(6)で挙げた拙著の一八三―一九〇頁を参照。

(12) 「宗教と科学」関係論との関連(病い・癒し・健康をめぐる諸問題など)を含めた次元論については、声名定道「ティリッヒ——生の次元論と科学の問題」現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』創刊号、二〇〇〇年、一一―一六頁、を参照。

(13) この森田からの引用は、森田雄三郎「現代神学はどこへ行くか」(教文館、二〇〇五年)に所収の「現代神学の動向」(一九八七年)からのものであるが、同書所収の「創造と進化——創造における無」(一九九〇年)においても、モルトマン論が展開されている。モルトマンのほとんどの主要著作は邦訳がなされているが、「わが足を広げるところに——モルトマン自伝」(新教出版社、二〇一二年)として邦訳された自伝 (*Weiter Ramm. Eine Lebensgeschichte*, Gütersloher Verlagshaus, 2006.) に詳細が示されているように、モルトマンの思想の発展史は、初期(「希望の神学」以前、一九六四年まで)、前期(一九六四年～一九八〇年)、後期(一九八〇年～現在)に分けることができる(初期と前期の区分は再考を要するかもしれない)。本稿で論じるのは、前期と後

期の思想である。

(14) 神の行為と人間の行為との結びつきはキリスト教思想の特徵的論点と言えらるものであるが、たとえは、賀川豊彦は次のように述べている。「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じていることである。この可能性を信じてることそれ自体が人間の活動を要求する」(賀川豊彦『友愛の政治経済学』日本生活協同組合連合会、二〇〇九年、四五頁)。なおこの引用文献の原書は、Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936 である。

(15) エルトマンの生命倫理に関する議論は、人間学的な連関を重視する点で、L・シーン他『ドイツ応用倫理学の現在』(ナカニシヤ出版、二〇〇二年)において紹介されたドイツの伝統とでも言うべき文脈に属していると言えよう。

(16) 自然神学の由来については、注(3)に挙げた拙著の二九一四六頁を参照。

(17) マンツラスの自然神学をめぐる議論については、本稿論者も共訳者として訳の一部を担当した、『自然』を神学する——キリスト教自然神学の新展開』教文館、二〇一一年 (Alister E. McGrath, *The Open Secret. A New Vision for Natural Theology*, Blackwell, 2008.) などを参照。また、より広範な研究動向については、注(3)に挙げた拙著を参照。

(18) マンツラスは、前注で挙げた著書において、啓蒙主義的自然神学がめざした「伝統超越的な合理性」(trans-traditional) に対して、キリスト教自然神学がめざすのは「伝統特殊な合理性」(tradition-specific) であるとし、合理性概念の再検討という問題を提起している。合理性と伝統(自律と他律)という近代的な枠組みが問われつつあるのである。

(19) ハンペルトの科学論 (Wolfhart Pannenberg, *Wissenschaftstheorie und Theologie*, Suhrkamp, 1977.) は見込み問題意識は、その後、次のような英語圏の思想家において展開されることになる。

Philip Clayton, *Explanation from Physics to Theology: An Essay in Rationality and Religion*, Yale University Press, 1989.

Nancy Murphy, *Theology in the Scientific Reasoning*, Cornell University Press, 1990.

(20) 次の著書に見られるマンツラスの意味論への接近は、マンツラスの思索の深まりと解することが可能かもしれない。

Alister McGrath, *Surprised by Meaning. Science, Faith, and How We Make Sense of Things*, Westminster/John Knox Press, 2011.

(21) 本稿で取り上げたエルトマン『創造における神』は、環境論的神学というべき内実を有しており、リネーサーウのニコ・フ

ミニスト神学と多くの議論を共有している。クレイトンは、*Mind & Emergence. From Quantum to Consciousness*, Oxford University Press, 2004で脳神経科学に正面から取り組んでいる——拙論「脳科学は宗教哲学に何をもたらしたか」(匿名定道・星川啓慈編『脳科学は宗教を解明できるか?』春秋社、二〇二二年)を参照——。また、遺伝子工学に対する神学的取り組みについては、金承哲『神と遺伝子——遺伝子工学時代におけるキリスト教』教文館、二〇〇九年において、その問題状況が的確に整理されている。

(22) 本研究は、科学研究費補助金(C)「社会科学との関連におけるキリスト教自然神学の再構築——環境論と経済学を焦点として」(平成二二年度―二四年度。課題番号二二五二〇〇六一)の補助を受けて行った研究成果の一部であるが、自然神学の社会科学への拡張についてはその研究成果報告書を参照。

(筆者 あしな・さだみち 京都大学大学院文学研究科教授／キリスト教学)

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The Significance of Natural Theology in the modern Christian Thoughts

by

Sadamichi ASHINA

Professor of Christian Studies

Graduate School of Letters

Kyoto University

In contemporary society, science has become an indispensable presence. But at the same time, science is an intellectual issue which warrants further reflection; and even in discussions of Christian Thought, since 3/11 topics relating to science such as “Christianity and Nuclear Power” have been vibrantly debated. Keeping in mind such weighty science-related technological issues as these, the purpose of this paper is none other than to attempt a full-scale reconsideration of the significance of traditional Natural Theology as the foundational theory in evaluating scientific technology from a Christian standpoint.

To this end, an historical analysis of the interrelationship of “Science and Religion” since the modern period is critical. As such, this paper will focus on two representative Christian thinkers of the early and mid-twentieth century: Paul Tillich and Jürgen Moltmann. In doing so, Moltmann’s proposal in his later works of a theoretical basis regarding the cooperative and complementary work of science and religion in underpinning Natural Theology will become very clear. Moltmann’s later works represent a watershed in twentieth-century theological undertakings in this regard; but as the Conclusion section of this paper points out, discourse on the relationship between science and religion is still as vibrant as ever, and there is much anticipation for new developments in this field.